

2013年10月25日 全6頁

# 新興国の資金流出の影響と銀行の動向

## BIS 報告銀行による国際与信残高統計

金融調査部 兼 経済調査部 研究員  
神尾 篤史

### [要約]

- 2013年6月末の国際与信残高は25兆164億ドルと前期(2013年3月末)に比べ▲2,174億ドル(前期比▲0.9%)と、僅かな減少となった。特徴的なのは新興国向けが前期に比べ▲1,106億ドル(同▲2.2%)と、4四半期ぶりに減少したことである。
- 国別では成長率低下、経常赤字、高インフレ率等のいずれか、または複数の問題を持つブラジル、インド、メキシコ、ロシア向けの与信減少が大きい。与信減少額を対GDP比で見ると、ブラジル、ロシア向けはリーマン・ショック時に匹敵、もしくは若干下回る影響を受けたことになる。
- 市場では米国の量的金融緩和の縮小が年明けに先送りされるとの認識が広がり始めている。新興国にとっては、多少の時間的猶予が与えられた格好になっているが、問題の解決に取り組まなければ、資金流出は再現される可能性が残る。先行き、世界経済が回復への歩みを進める中で、改革を行えなかった新興国と改革を実施した新興国があるとなれば、資金は後者へと流れ、選別が進むことになろう。

## 国際与信残高～4 四半期ぶりに新興国向け与信が減少

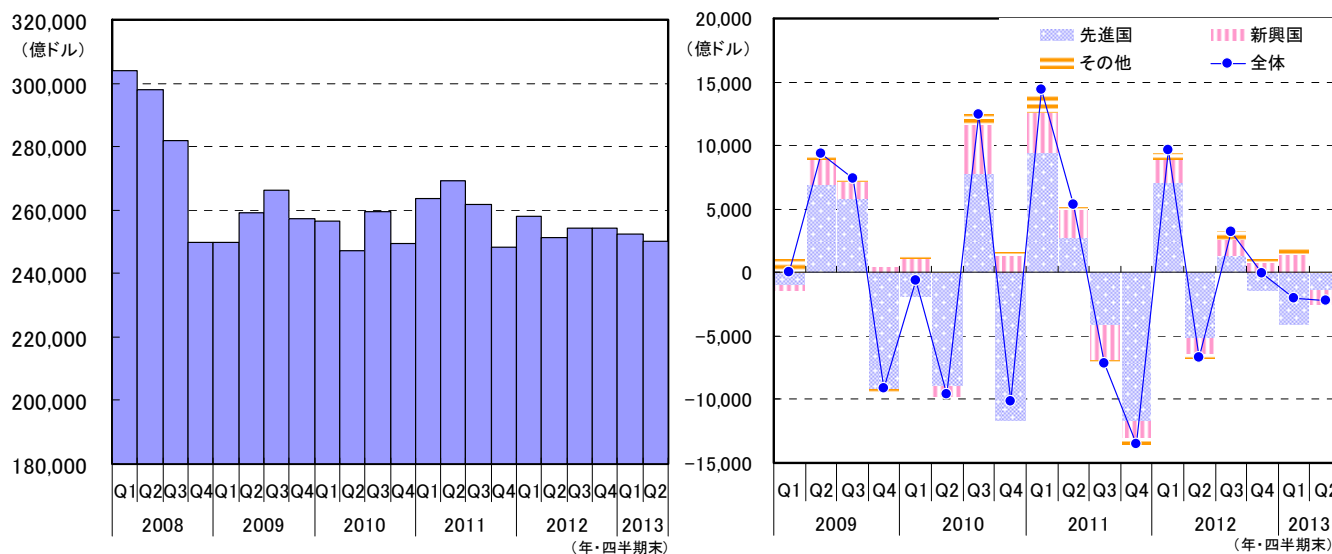
BIS（国際決済銀行、Bank for International Settlements）が BIS 報告銀行による 2013 年 6 月末時点の国際与信残高<sup>1</sup>を公表した。2013 年 6 月末の国際与信残高は 25 兆 164 億ドルと前期（2013 年 3 月末）に比べ▲2,174 億ドル（前期比▲0.9%）と僅かな減少となった。与信残高増減の内訳をみると、先進国向けが前期差▲1,394 億ドルと 3 四半期連続の減少となったことに加え、新興国向けが同▲1,106 億ドルと 4 四半期ぶりの減少となった（図表 1）。金額では先進国向けに比べ新興国向けが小さいが、前期比でみれば先進国向けが▲0.8%、新興国向けが▲2.2%となった。

詳細な与信推移のデータは不明だが、米連邦準備理事会（FRB）のバーナンキ議長が米国の量的金融緩和の縮小に言及した 5 月末以降、新興国向け与信の潮目が変わったと思われる。すなわち、対ドルの新興国通貨の減価にみられるように、新興国からの資金流出が生じたのである。（図表 2）。とりわけ、市場から厳しい視線を注がれたのが成長率低下、経常赤字、高インフレ率等の問題を抱える新興国である。

以下では、与信受入側と与信側（銀行）の動向を確認する。

図表 1 国際与信残高の推移（左図）

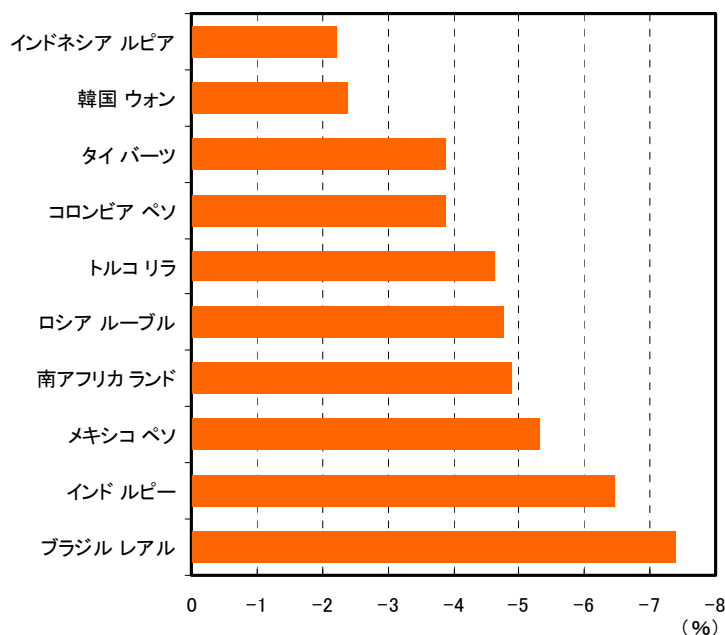
国際与信残高の増減 前期差（右図）



（出所）BIS、Haver Analytics より大和総研作成

<sup>1</sup> 本レポートでは、断りのない限り最終リスクベースの数値を扱う。これは、与信対象の直接的な所在地ではなく、「与信の最終的なリスクがどこに所在するのか」を基準に、国・地域別の分類を行ったもの。なお、この値は「国境を越える与信」、「外国銀行の支店・現地法人による外貨建て国内与信」、「外国銀行の支店・現地法人による地場通貨建て与信」で構成される。

図表 2 主な新興国の対ドル為替減価率（2013年5月22日～6月28日）



(出所) Bloomberg より大和総研作成

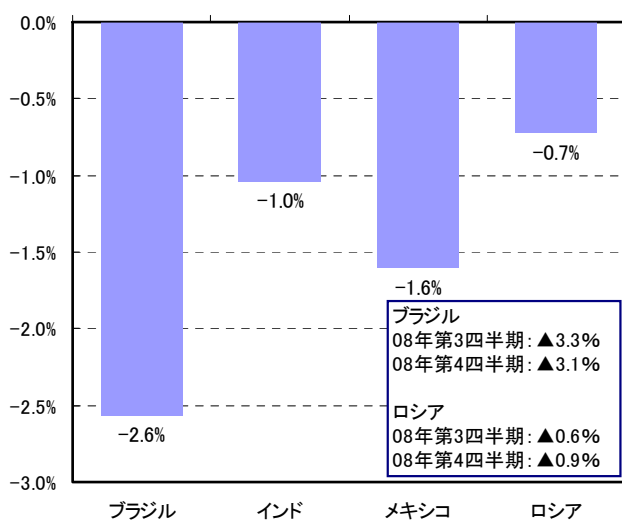
## 与信受入側の動向

新興国向け<sup>2</sup>与信を地域別にみると、アジア大洋州新興国向けは前期差+35億ドル（前期比+0.2%）と僅かに増加したものの、その他の新興国地域向けでは減少した。もっとも、アジア大洋州新興国に属する国々が影響を受けなかったわけではない。インド向け（同▲191億ドル）等が減少したものの、中国向け（同+342億ドル）の増加で相殺したことが要因である。その他の新興国では、ラテン・アメリカ新興国向けで同▲869億ドル（同▲6.9%）と大きな減少を記録した。アフリカ・中東新興国向けは同▲157億ドル（同▲2.9%）、欧州新興国向けは同▲114億ドル（同▲0.8%）となっている（図表3）。

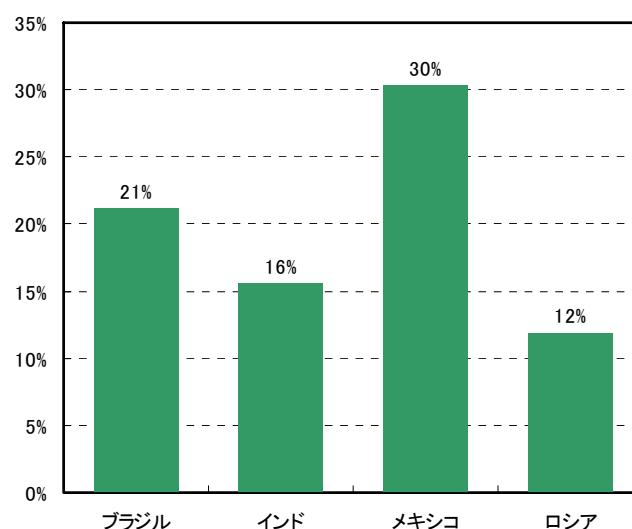
国別に与信残高の減少をみると、最も大きく与信を減少させたのがブラジル向けで同▲577億ドル、次いでインド向けは同▲191億ドル、メキシコ向けは同▲189億ドル、ロシア向けは同▲145億ドルとなっている。これらの国は、強弱はあるものの成長率低下、経常赤字、高インフレ率等のいずれか、もしくは複数の問題を抱えている国である。各国の経済への影響を測るために与信減少額の対GDP比でみたものが図表3である。ブラジル向けは▲2.6%、インド向けは▲1.0%、メキシコ向けは▲1.6%、ロシア向けが▲0.7%となった。ブラジル、ロシア向けはリーマン・ショック時に匹敵、もしくは若干下回る程度の与信減少となった。もっとも、これらの国のGDP成長率をみると、リーマン・ショック時のような影響は受けていない。リーマン・ショック時にはこれらの国に加え、先進国でも顕著に資金流出が生じたが、今回は先進国からの資金流出が限定的なことが上記の国への影響が小さかった理由の一つとして挙げられよう。

<sup>2</sup> 新興国は、アジア大洋州新興国（中国、韓国、インド、ASEANなど）、欧州新興国（チェコ、ポーランド、ロシア、トルコなど）、ラテン・アメリカ新興国（アルゼンチン、ブラジル、メキシコなど）、アフリカ・中東新興国で構成される。

図表3 国際与信残高減少額の GDP 比 (左図)



国際与信残高の GDP 比 (右図)



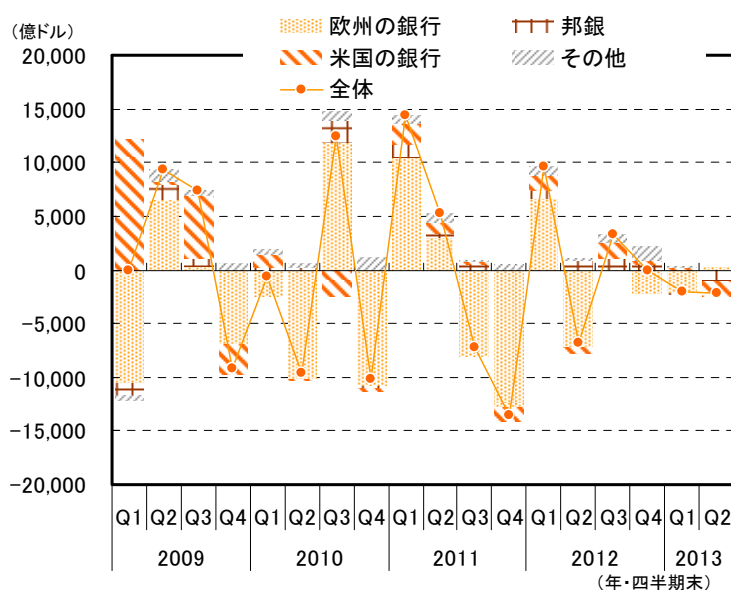
(注) 与信残高減少額、与信残高ともに 2013 年 6 月末のデータ。2012 年の GDP データで除算。

(出所) BIS、世界銀行、Haver Analytics より大和総研作成

## 与信側（銀行側）の動向

与信側（銀行側）から国際与信残高の全体感をみると、邦銀は前期差▲1,114 億ドル（前期比▲3.7%）と 2 四半期連続の減少、米国の銀行（以下、米銀）は前期差▲1,297 億ドル（同▲3.9%）と 4 四半期ぶりの減少となった。欧州の銀行<sup>3</sup>は同+155 億ドル（同+0.1%）と 3 四半期ぶりに僅かながら増加した（図表 4）。

図表4 与信側（銀行側）からみた国際与信残高 前期差



(出所) BIS、Haver Analytics より大和総研作成

<sup>3</sup> 欧州の銀行は、オーストリア、ベルギー、フランス、ドイツ、ギリシャ、アイルランド、イタリア、オランダ、ポルトガル、スペイン、スイス、トルコ、英国などの 16 ヶ国で構成される。

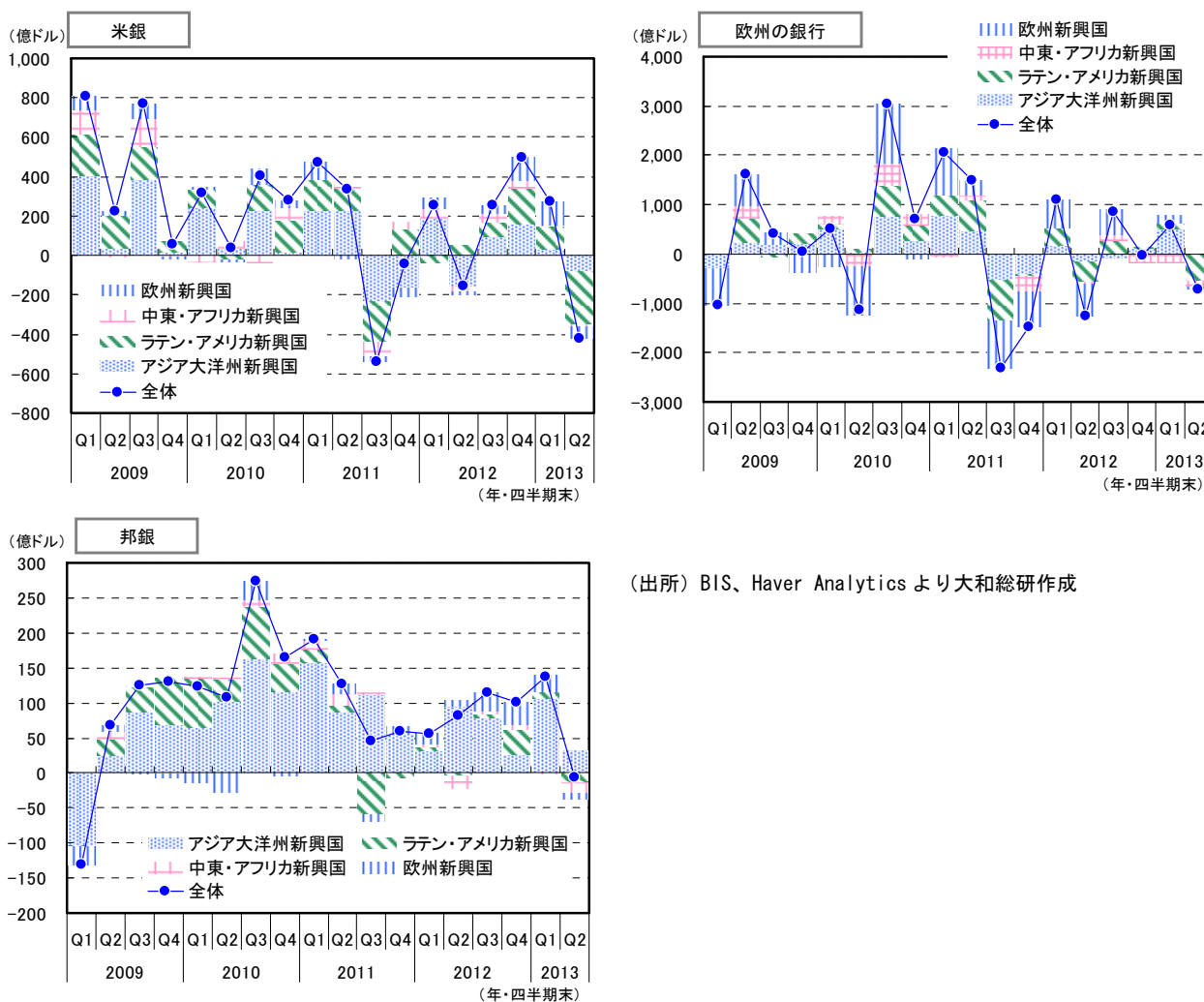
### (米銀、邦銀、欧州の銀行の新興国向け国際与信残高)

新興国向けでは米銀、邦銀に加え、全体の与信残高が増加した欧州の銀行でさえも、与信残高を減少させた。上述したブラジル、インド、メキシコ、ロシア向けが米銀、欧州の銀行の与信残高減少額の上位を占めている。邦銀、米銀、欧州の銀行が揃って同じ行動をとった、もしくはリスクの高まりを横目にみて同じ行動をせざるを得なかったことが理由と思われる。

米銀の与信残高の内訳をみると新興国向け与信は同▲422億ドル（前期比▲5.2%）の減少となった（図表5）。この大きな割合を占めたのがブラジル向けである。ブラジル向けは同▲193億ドル、次いでロシア向けは同▲70億ドル、インド向けは同▲70億ドル、メキシコ向けは同▲53億ドルとなった。欧州の銀行では新興国向け与信は▲715億ドル（同▲2.1%）となっており、ブラジル向けは同▲367億ドル、メキシコ向けは▲144億ドル、インド向けは▲86億ドル、ロシア向けは▲82億ドルとなった。邦銀では新興国向けは前期差▲6億ドルと2009年3月末以来、17四半期ぶりに減少した。与信を最も減少させたのはブラジル向け（同▲16億ドル）である。

なお、各国銀行の先進国向け与信は邦銀では同▲1,082億ドル（同▲4.8%）、米銀では同▲1,035億ドル（同▲4.8%）、欧州の銀行では同+820億ドル（同+0.7%）となった。

図表5 米銀、邦銀、欧州の銀行の新興国向け国際与信残高増減 前期差



## 国際与信の先行き

今後の国際与信の先行きを考える上でポイントの一つは、米国の量的緩和縮小のタイミングである。足元では、米国の雇用環境の改善が足踏みしており、年内の縮小開始は微妙な状況になっている。年明け開始が市場では意識されているように思われる。新興国にとっては、多少の時間的猶予が与えられた格好になっているが、新興国自身の状況に変化がなければ、資金流出は再現される可能性が残る。

もともと、世界経済は着実に回復への歩みを進めている。欧米の銀行の貸出基準も厳格化から緩和へと向かっている。また、基本的には米国の量的緩和縮小は米国経済の回復の進展を示すものであり、世界経済を考える上ではポジティブなサインであることを考えれば、国際与信は着実に回復するとみられる。その際に新興国へ資金が流入するためには、先送りしてきた問題の解決に取り組むことである。先行き、世界経済が回復への歩を進める中で、改革を行えなかった新興国と改革を実施した新興国があるとすれば、資金は後者へと流れ、選別が進むことになるだろう。